

昭和20年7月6日轟町の千葉陸軍兵器補給廠を18時に出門帰宅、夜毎の空襲警報で起されるため、寝不足を取戻そうと早寝をしたがウトウトしたかと思う間もなく、空襲警報のサイレンに起されて、身仕度をして補給廠目指して自転車を走らせた。無論無灯火だが皆も同じで衝突しないのが不思議な位である。通り道の人家ではラジオを付けっ放しで情報を聞いている。自転車を止めて聞くと甲府を爆撃中と放送していたので、途中で引き返し帰宅した。甲府がヤラレテイル気の毒にと両親と話して横になったが、2時間位後に千葉がヤラレルとは。

どの位眠ったか夢うつつにサイレンの音がしたかと思うと、父が敵機は房総南部と言ってる、起きろと怒鳴ったので一変に目が覚めて身仕度をしながら聞くと、敵B29館山付近を北上中と言う。直感で今度は千葉だと思った、何と言っても軍事施設が多い、連隊が(2)、陸軍の学校(3)、兵器補給廠(1)、で今迄は九十九里から進入、爆撃後は九十九里浜へ脱去、又は伊豆、相模湾方面から進入し北進爆撃後東へ変針九十九里へ脱去と言う行動が多かった、もう爆音は頭上、不意を突かれた、焦った、手探りでゲートルを巻き表へ出ようとした時、誰かが焼夷弾が落ちたと叫んだ、見ると亥鼻山越しに空が赤くなった。

後で判ったのだが、市街地の周辺部に輪の様に落して、逃道を塞ぐ様にし、続いて中心部に大小無数の焼夷弾爆弾を落した訳で、見る見る空が赤く染まる。自転車を引き出して補給廠に行こうとすると母が掴み、通り道の町はもう火の海、行かないでと放さず、振解こうとしたら今度は服を両手で掴み、此所えも焼夷弾が落ちるかも知れない、両親を見捨てても行くのかと、涙声で止める母を突飛ばす事も出来ずモタモタしてる間に、タイミングを外し、泊りの週番勤務者や家が近くにあり駆けつけた同僚には申し訳ないと思ったが駆けつけるのを断念。益々火の手が広がっているのが判る、このままでは何時直撃を受けるかも知れないので、3日位前迄近くに居た兵隊が、台地に掘った横穴式防空壕が空いて居るのを思い出し、爆音の途切れた時に父と母を連れて入った。奥で左右の壕に連絡して居り、中も広くて一安心、振り向いて見ると中心部の空が特に赤い、次々に襲って来るB29の爆音、集束焼夷弾(後で補給廠の技術士官が焼夷弾の空に成ったのを集めて組立て見て判ったのだが、6角型のが38発位上下2段に束ねて有る)が高空で分解し、バラバラに成り落ちながら、鉄板とぶつかり合う音がガランガランと聞える、サーサーと空気を切って落ちて来る音、これも後で判ったのだが6角型の焼夷弾には尾翼がなく、信管の有る反対側に長い布片が付いて居り、風の抵抗で垂直に落ちる様になってるが、其布の先端に火が付き落ちて来るので花火の様に見えた。

爆音の途切れた時に、防空壕の上の台地に登って見ると、千葉寺、星久喜、矢作、医大方面も火の手が見える。近くは大学病院旧館(木造で当時は空屋で使っていない)護国神社(亥鼻山に在った)も燃えてる、手が付けられない状態、又、爆音が近づく、大急ぎで防空壕に飛び込む、一寸間を置いて出て見ると、亥鼻山男子師範学校の向側の空は全部真赤、知人や同僚や其家族の人達は無事脱出したんだろうか心配。左手の長洲、港町の方角も火の手が見える。市街地中心部の燃える火が、

雲に反映して明るく、夜中と言うのに照明無しで自由に歩いたり走ることができ
る。又、B29が来る、防空壕に入ると何回繰返した事か。爆音が全く聞こえなくな
ったのは白々と夜の明ける頃でした。父母と家に帰り、朝食の仕度の間に母の勤
め先、大学病院を見に行くと、病院は無事、学部の方は5、6ヶ所を残して焼けて
いるのを見て帰り、母に知らせると病院が無事であることを喜んだ。朝食を済ませ自
転車で補給廠に向かって急いだ、都川を渡ると一望の焼野原、余燼の燻る中を進む
と左の方は良く見え無い、なおも走ると、国鉄千葉駅、日通千葉支店、駅から椿森
陸橋迄の駅側の家は焼けずに残っている。椿森の踏切を渡り、坂に掛ると焼けた電
柱が右に左に倒れており自転車を担いで跨ぐ、鉄道聯隊の土手に倒れかかっている
のはけとぼして、安全を確かめ（中にはズシンと落ちるのが有る）、下を這って通
り抜け、横にした自転車を引摺ることを2、3回繰り返した後、自転車を走らせ
た。道路の両側の家も所々焼けている。漸く正門に着き歩哨の兵隊と守衛に敬礼、
入門し、所属の輸送科事務室前に着くと、女子事務員の誰かが、清水さんが来たと言
うと、早く出勤していた人達が無事で良かったと言うので、昨夜駆けつけず済み
ませんと言うと、庶務の長島准尉殿が何も無理して火の中を来なくとも、無事で何
より、家はどうか、と聞くので、家も無事で有りますと答えると、そうか、それは
良かったと言うので門から此方は焼けていないですねと言うと見える所は無事だ
が、東と西はやられてる、見て来いと言うので見に行ったが、校舎に使えるような
「元」気球庫の大きな倉庫が焼失している。又東の鉄道引込線ホームに行ってみる
と貨車入線次第、すぐに貨車積する様にホームに集めて置いた器材が焼けて瓦礫と
成っている。西側に行くと屋根が鋸の歯の様な形をした広大な倉庫が焼失してる。
さらにその鉄道引込線と塀の間に在る空地に積上げて在る板材角材も所々焼けて無
くなっている。それを加工梱包箱にする木工場も一部焼けているのを見て事務室に
戻ると、准尉殿が大木工員が収容されて来たと言うので、どうしたのですかと聞くと、
駆けつける途中、栄町通りで負傷後死亡の知らせが、同じ防空壕に入っていた
人から有り、週番が収容に行ったのだと言うので驚いて居ると、お前も行って納棺
を手伝い医務室へ行くように、と言われて急いで行って見ると、両手は空を掴み歯
を喰い縛り目を明けたまま息絶えて居る。それでもさすがは戦場帰りちゃんと止
血をして有るのを見て、助かりたかったんだらうなあと思うと急に涙が出た。私が
太股の傷を見て、この位の傷でなぜ死んだんだらう止血もして有るのにと
衛生の下士官が死因はここだと頭を指したので、手で触ると頭半分位がブヨブヨに
成ってるので、これはどうしたのか、と聞くと足の負傷で倒れる時に鉄帽が外れて
頭を道路か電柱か何かに強打、それが原因だ、防空壕に引摺り入れて呉れた人に、
補給廠に連絡して下さいと言いつける内に声が段々小さく、途切れ途切れに成りや
がて何も言わなくなったそうだといいながら指で瞼を閉じてやった。丁度其時木工
が大急ぎで作った棺を届けて来たので、居合せた皆で納棺、事務室に戻り長島准尉
殿に大木工員の納棺終了と報告すると、御苦労、ところで清水、大木工員の
家を知っているかと聞くので、知っていますと答えると、急いで行って妻君を呼ん
で来る様にと命令を受けて出掛け様とすると、妻君には死んだとは言わない、途中で
気を失ったりすると大変だからと注意を受けて出掛けたが、朝は難儀した道路の

電柱も片付けられて早く走れた。都川を渡ると市場町の表通りの町並は無事。県庁、市役所も無事。ホッとして踏切を越すと、所々虫喰状に焼けてる大木さんの家の無事を祈りながら近付くと嬉しや3、4軒位手前で、火は消えて居り大木さんの家は無事。近付くと人が集まって居る。大木さんの死亡がもう知れたのかな？と思い近づき、玄関近くの人に補給廠から来ました、奥さん居ますかと聞くと、玄関内の人から補給廠から人が来たと呼ぶと、赤ちゃんを抱いた奥さんが見えたので、昨夜の空襲で大木さんが負傷したので真ぐ同行をと言うと、居合せた人達が皆「えっ」と驚いた、一寸と間を置いて奥さんが実は入院中の主人の妹が昨夜亡くなり今病院に出掛ける所でしたとの事で、人が集まって居たのはそのためだったのかと判ったが、頭をガンと殴られた思いで次の言葉に困り呆然としてると、町内の役員と思われる人が、病院の方は誰か4、5人で行って貰い、補給廠の方は、奥さんが行くとして上の子をどうしよう、置いて行き後で泣かれてもと言うので、良く聞いてみると上に2才位の女兒が居ると言うので、自分が「オンブ」しますと言い、鉄帽を自転車のハンドルに結わえて、奥さんが持って来た男物の三尺帯でオンブして歩き出したが、朝からの様子に幼児ながら何か判ったのか、人見知りも、泣きも、グズリもせず、補給廠への約1時間余の間黙ってオンブされていたのも何か哀れだった。市場町を通り過ぎ都川を渡ると見渡す限りの焼野原を見て奥さんが、これほど酷いとは思いませんでした、昨夜空が赤くなっているのに主人が出掛けようとしたので、行かないでと止めたのですが、今行かないでどうすると、取纏る私の手を振切って出て行ったのですが、この様子では、もしかしたら主人は駄目なのでは、もう亡くなって居るのではと聞かれ、自分もこの様な状態だったので出勤が大分遅れて補給廠に行くと真ぐに奥さんを呼びに行く命令を受けて来たので、大木さんを見て無いのですと言うと、そうですか御苦労様ですと言われたが、死亡を知って居て嘘を言う心苦しき、後は真夏の太陽と焼野の熱気の中を大汗を流して黙々と歩いた。

自転車を押しながらやっと補給廠に着き、門の歩哨の兵隊と守衛に昨夜の爆撃で負傷した工員の奥さんを連れて来ましたと告げて入門。輸送科事務室に着くと長島准尉殿が御苦労と言い、女子事務員が赤ちゃんと私の背の幼児を抱き取ってくれて、清水さん背中が汗でひどいよと言ったので、別室で汗を拭き、自分の席に座ると、奥さんは准尉殿に連れて行かれ医務室に行ったとの事、誰かが大木さんの亡くなった事を奥さんに言ったのかと聞くので、言うなと命令を受けて迎えに行ったので話して有りませんと答えると皆が奥さん驚くだろうな、可哀想になあ、気の毒になあと口々に言ったが、私は奥さんに嘘を言ったので益々心苦しくなった。午後、奥さんと幼児をオンブした女子事務員が先発し、そのあと特大のリヤカーに大木さんの棺を乗せて4、5人で送って行ったが、家に着いて御苦労様ですと言われても朝嘘を言った為に奥さんの顔を真直に見られなかった。

大木さんは支那事変が始まり上海に飛火して戦場が広がり始めた時に、東京、千葉、山梨在住の予備役兵を動員召集して編成された101師団の輜重兵部隊に所属、出征し上海戦線を始め広く中部支那の戦場を行動し、時に上海付近の戦場では「ブリキ」の湯タンポに水を入れて腰の帯革の両側に結び付けて飛んで来る敵弾の下を這って畑の中の塹壕に居る歩兵に届けたり、有る時は昼夜兼行で前線部隊を追

求して食糧、弾薬、其他の物資を届けたりと補給、輸送と言う大事な任務を3年余り続けて除隊後、千葉補給廠に採用されて輸送科に配属と成り働いて居りましたが、戦後有名になった通称「関特演」に再度召集されて満州に渡り関東軍の下で暫く勤務後、召集解除となり復職、輸送科の梱包材料倉庫の責任者として働いて居りました。真面目で親切で年下の私達のことも見下したり、馬鹿にする事も言わず本当に良い人で有りました。

昭和20年7月7日付で戦死と成り、雇員に昇進の知らせが有りました。

市内に火葬場が2カ所有りましたが市民の死亡者も多く、使えぬ為、鉄道聯隊演習場（現競輪場入口付近）に鉄道の古い枕木を積上げて鉄道聯隊で亡くなった兵隊の方と棺を3体並べて安置。入隊前僧職だった兵隊さんが袈裟を着けて読経、告別式後ガソリンを掛けて点火後、一旦職場に戻り、16時頃に小川雇員と最後の茶毘当番に行き、焼材を次々と足しながら段々に骨と灰に成っていくのを見てると大木さんの色々な事が思い出されまさか野天の原で同僚を焼くなんて、涙が次から次へと出て辛い悲しい日でした。夜は鉄道聯隊の兵隊さんが現場の衛兵に立ち、翌日9時に骨場に行きましたが、又、涙でした。

40余年過ぎた今でも昨日の事の様です。奥さんの止めるのを振切って駆けつける途中負傷死亡した大木さん、母に涙声で取組られてとは言いながら一番大変な時に駆けつけなかった事が今も心に引掛り、奥さんに嘘を言った事と重なり思い出すと胸が痛みます。

爆死した 友の棺乗せ リヤカーを
引いた焼野も 今繁華街